

授業「コピーライティング」(旧「俳句とコピーライティング」)の課題分析

ー縦組みと横組みー

柴田奈美・桑野哲夫

1. はじめに

デザイン学部造形デザイン学科専門科目に、平成19年度から「俳句とコピーライティング」が演習科目として加わった。授業の目標は「言語表現に興味を持ち、積極的に俳句創作、キャッチコピー創作を行うことを通して、コピーライティングの必要性を理解し、言語感覚を身に付ける」というものである。しかし、言語表現に対して苦手意識を抱く学生が多く、授業では動機付けの工夫が必要である。

平成19年度以降、平成21年度までの授業で「俳句作りと句集の装丁」という、言語表現とビジュアル表現を融合させた課題を出したところ、学生は熱心に取り組んだ。この方向で授業研究を重ねてゆき、3回報告記事を発表してきた(注1)。

2. 研究の目的

授業では、俳句理論の解説や俳句創作に前半の時間を使い、後半で句集の装丁の構成や、フォントの選び方などの解説を行った。その基本は、単調にならないように、総合的に変化のある面白い作品を作るということである。

今まで積み重ねてきた授業者のコメント力が、学生たちの作品にどのように活かされているのか、今回は「縦組みと横組み」という観点から学生の作品を分析したい。

現在は横組みの出版物も多いが、本来は日本語は縦書きが基本であり、特に俳句の場合はほとんどの俳句雑誌が縦組みを採用している(注2)。しかし、近年インターネットの普及により、インターネット句会報などには横組みが大半という現状である。このような状況の中で、学生はどのように縦組み、横組みを自分の装丁に選んでいるのか。その傾向を把握した上で、どこに工夫をしているのかを分析する。

3. 研究結果

平成22年度の学生(2年生)の46作品を、表題・代表句・帯文を縦組みか横組みか、混合かで分類したところ、次のような結果となった(図4参照)。

- (1) 縦組み・・・「だいはっけん」など14作品
- (2) 横組み・・・「23:00」など6作品
- (3) 混合・・・「泡沫ガール」など26作品

混合の中・・・表題のみ縦は18作品。横は8作品
帯のボディコピーのみ縦は7作品、
横は19作品

圧倒的に表題は縦で、ボディコピーは横とする学生が多かった。これは、「句集は縦書き」というイメージの強さと、変化を付けなければいけないという意識の強さによるものと推測される。

次に、一部の作品の解説を記しておく。

①「だいはっけん」藤定 萌(図1参照)

代表句は「竹馬に乗って見下ろすつむじかな」。竹馬に乗ったところ、いつもは見上げている大人をつむじを発見して驚いた、という句意。不安定な竹馬からの視点と渦巻くつむじとの取り合わせが、ちょっとした非常を感じさせて秀逸である。「つむじ」を黒とグレーでダブらせて円形に表現。つむじを視覚的に描こうとしたもの。子どもの視点にたった素直な驚きの気持ちを、句集名「だいはっけん」としている。ひらかな書きにしたのも、子ども心を表現するためであろう。縦書きであるが、斜めに倒し、太さや大きさにも変化を付けている。特に「だ」は太陽を思わせる赤丸で囲まれ、シンプルな装丁にアクセントを与えている。男の子はブロック塀の上を歩き、その後を黒猫が歩いている。俳句で詠まれた竹馬をそのまま使うのではなく、子どもが「危ない」と大人から叱られるブロック塀歩きを選んだ点が、工夫点の一つ。また、後ろ向きに描かれているので、どのような表情なのかを、読者に想像させる。全て表現するのではなく、読者に想像させる余地を残す、という俳句文芸に通じる表現の仕方である。帯文は「いつもと異なる目線の高さに新鮮さと少しばかりの恐怖を感じながらも一歩一歩前へ踏み出す。この時見つけた発見『母のつむじは右巻きである』という事実はとても大切なことのように感じた。たまにはのんびり思い出を振り返ってみてもいいだろう。そうすれば新しい発見があるかもしれない。」とある。「のんびり思い出を振り返り」、子どもの時の感動を思い出しての一句であろう。シンプルでありながら、単調にならないような工夫の見られる作品である。

②「23:00」春藤亜理紗(図2参照)

信号機のイメージで、赤・ピンク・青・緑・黄色・水色など、鮮やかな色の中で、白い歩行者型が歩くポーズをとっている。題名が「23:00」という意表をつくもので、インパクトは強い。帯は夜の闇を思わせる黒で、代表句もキャッチコピーも白抜き。右端に橙色と白で「2010/本屋大賞/受賞」とあり、アクセントとなっている。全

体が横組みとなっているが、最下段の「夜は自由だ!」は大きく太字で、右上がりになっており、単調に陥るのを防いでいる。代表句は「しばらくは笑っていてよおぼろ月」である。おぼろ月に「しばらくは笑っていてよ」と語りかけているようにも思えるし、友達と話しているようにも解釈できる。キャッチコピーを読むと、「夜は人を酔わせます。/気恥ずかしいひとりごと、堂々巡りな悩みごと、お昼には絶対こぼさないここだけの言葉。/誰かの頭をのぞき見している気分です」とある。「ちょっと愚痴こぼすけど、しばらくは笑って聞いてよ」と頼んでいるのか。季語の「おぼろ月」のイメージが柔らかかで暖かな印象を与え、深刻にはならない。おぼろ月のぼんやりとしたイメージと、信号機の滲んだような色とがうまく重なっている。夜になって自由に思考が動き出す、言葉が自然に出てくる、という帯文のメッセージが、動き出す人型でも表現できている。言語表現とビジュアル表現とが、うまくイメージ的に結びつくように計算された作品である。さらに「23:00」の数字を、デジタル文字のように作れるとよかった。

③「泡沫ガール」渡辺莉加(図3参照)

金魚の蘭鑄を装飾化したような、華やかな赤と黄土色の金魚の絵を中央に一匹据え、上部には鱗か幕を連想させる模様が赤で描かれている。題は「泡沫ガール」で、気泡をイメージさせるデザイン体のフォントである。造語の「泡沫ガール」が、何を意味しているのかと、読者を惹きつける力を持つ。代表句は「金魚掬ふ/少女ひらひら/帯ゆれて」。祭の夜店の金魚掬いの風景。少女のひらひら揺れる帯と金魚の尾鰭とがイメージ的に重なる。装丁の金魚はそれをビジュアル化したものであろう。文字は明朝体の横書きであるが、金魚の揺れる尾鰭の動きを連想させるような、柔らかな動きの感じられる表現である点に工夫が感じられる。帯は左を太く、右は細くしてあり、単調にならないような気遣いが見られる。帯文には縦書きで「大人になった。/記憶の中の少女は、/泡となって消えてった。//たまにはノスタルジーに、/ひたりませんか。」とある。独白と語りかけの部分に分かれており、短い文章の中にも「変化」を意識して心掛けていることが窺われる。

帯文も代表句も黄土色が使われており、装丁全体の統一感がある。少ない色数で、細やかに書き込んだ絵柄。さまざま点で「変化」を心掛けた作品である。

4. 結論

単調にならないように、俳句で表現したい内容をビジュアル的にも表現し、総合的に変化のある面白い作品を、と授業で繰り返し注意を与えたためか、縦書きと横

書きを用いる「混合」を選んだ学生が多く、58パーセントであった。また、縦組みのみ、横組みのみを選ぶ場合単調になりやすいが、その場合もフォントの工夫や文章の傾きなどで変化をつける工夫が見られた。

平成19年度から取り組み続けた「俳句とビジュアル表現の融合」の研究であるが、この「縦組みと横組み」という視点での分析の結果、さまざまな創意工夫の出来ていることが明らかになった。

注1) 柴田奈美『『俳句とコピーライティング』の教材開発一課題『俳句創作と句集の装丁』岡山県立大学デザイン学部紀要 Vol.15 No.1 2009年3月 47頁～50頁

柴田奈美・桑野哲夫・木塚あゆみ「『ビジュアルと言語表現の融合におけるデザインの可能性—『俳句とコピーライティング』の効果的な教育指導法を目指して—」岡山県立大学デザイン学部紀要 Vol.16 No.1 2010年3月 53頁～56頁

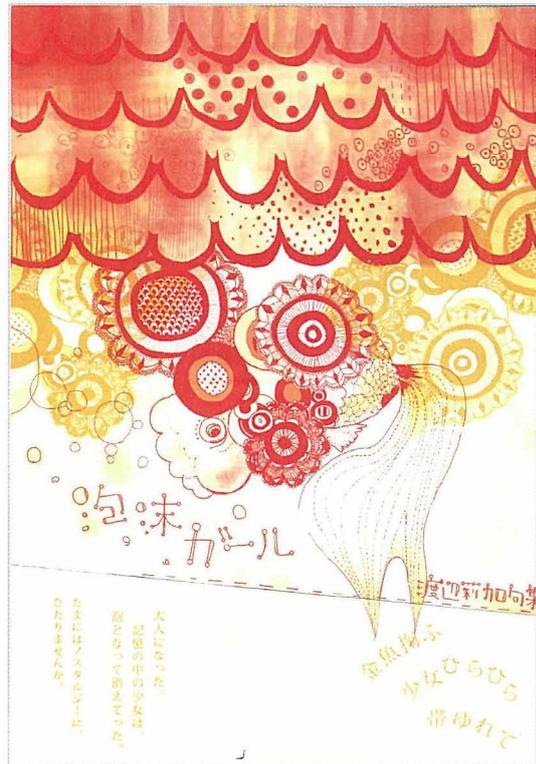
柴田奈美・桑野哲夫・八尾里絵子・木塚あゆみ「『ビジュアルと言語表現の融合におけるデザインの可能性—『俳句とコピーライティング』の効果的な教育指導法を目指して(Ⅱ)』岡山県立大学デザイン学部紀要 Vol.15 No.1 2011年3月 45頁～48頁

授業者のコメント力を付けることを研究目標の一つとし、2009年からは共同研究をさせていただき、現在に至っている。

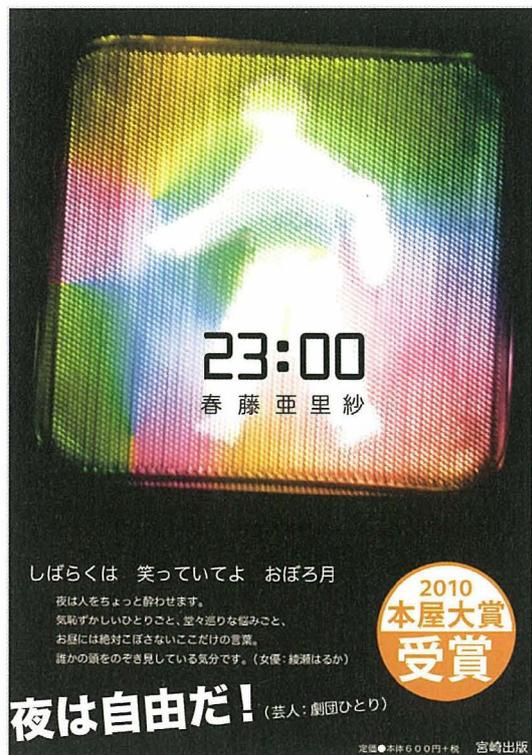
注2) 黛まどか氏が1996年に創刊された「月刊ヘップバーン」は全ページ横組みで、話題となった。2006年に通算100号で終刊。



(図1)



(図3)



(図2)

(1) 縦組み



(2) 横組み



(3) 混合



(図4)

*授業「コピーライティング」(旧「俳句とコピーライティング」)の課題分析 一縦組みと横組み一 柴田奈美・桑野哲夫